

砂遊びから見る乳幼児期の発達と保育の課題

笠間 浩幸 同志社女子大学教授

なぜ子どもは砂遊びに夢中になるのでしょうか。砂場では子どもが自分自身のペースで遊び、物事を進める中で、外の世界とつながり、自分が成長し変化していくことを自分自身で嬉しく感じるからだと考えています。

砂場という遊び場は、約200年前、ヨーロッパで生まれ、アメリカで発展します。十分に子どもという時代を生きられなかった当時の子どもたちが、砂場で遊ぶ中で生き生きと笑顔になる。その姿は大人たちに衝撃を与えました。時を経て、東日本大震災と原発事故により、戸外での遊びが制限される中で、精神的ストレスを抱えた被災地の子どもたちが室内砂場で遊ぶことで笑顔と歓声を取り戻した姿を見たとき、時代を越えた砂場の持つ力を再発見することができました。

子どもの成長とともに、砂場での遊びは大きく変化していきます。最初は五感や深部感覚など身体全体で砂と関係性を持って遊ぶ時期から、砂に直接触れるよりも「もの」を操作するために砂と関わる時期、砂そのものの性質や状態に関わって遊びを展開する時期。さらに生活体験が増え、人間関係が広がる中で、イメージや言葉の広がりとともに砂を介して友達との関わりを楽しむ時期、そして思ったことを形にしようと自分が持っている技術を最大限に活かしながら創造的なアートに挑戦する時期というように、砂遊びの変化は子どもの成長そのものです。

砂遊びのこのような系統的な把握と同時に、その一瞬一瞬の行動の場面を構造的に把握することも大切です。砂遊びの中から見られる発達の要素を考察した10項目は、その後、平成30年改訂・改定の要領・指針で出された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とほぼ重なるものでした。子どもの育ちとして大切にしたいことは砂遊びの様々な場面で見られ、また砂遊びで見られた大切な要素は全ての遊びや生活の中で見ていくことができるのです。何か特別な新しいことをしなければならないのではなく、改めてこれまでの保育実践をていねいな視点をもって捉えなおしてみるところが大事なのだと思います。

砂には子どもを育て、人と人をつなぎ、町や地域を創る力があると私は考えます。園には砂場があります。砂場の大切さと可能性を保育に活かし、子どもや保護者としっかりつながり、地域の子育て支援のセンターとして、かけがえのない子どもの時間と育ちを次世代に受け渡していただきたいと願っています。